

刑事

1929年(昭和4)に設立された旧刑事博物館は、設立当初は江戸～明治初期の法制度にかかる捕者道具や刑罰具(複製)などを収集していました。戦中の活動停止を経て、戦後活動を再開するにあたっては、収集方針を変更し、学術資料の収集を主眼として近世法律文書および明治立法史関係文書を収集することになりました。このような歴史を持つ刑事部門では、現在、下記のような特色あるコレクション群が形成されています。

■近世・近代の古文書資料や錦絵などの絵画資料

■捕者道具および捕者術の絵画・文献資料

■法制史関係の古典籍、高札および鑑札類、刑罰具の複製品

上記コレクションの充実を図るため、2022年度、2023年度は江戸関係の絵画資料と古文書資料、捕縛に関わる絵画資料と古文書資料を収集しました。今回は、これらの新収資料と、これに関わりの深い館蔵資料を合わせて展示いたします。



元禄14年（1701）刊の江戸大絵図。この時期、五代将軍綱吉が出した生類憐みの令のため、保護された犬を収容する犬小屋が中野に建てられた。本絵図には中野の犬小屋の様子が描かれている。

かいせん えどおおえず
改撰 江戸大絵図

遠近道印 作、板屋弥兵衛 板、元禄14年（1701）

参考資料＜常設展示室にて展示中＞「生類憐みの令」
動物の保護を命じる生類憐みの令



虎ノ門脇にあった譜代大名延岡藩内藤家の上屋敷の絵図。徳川家から天正19年（1591）に屋敷地を拝領し、明治4年（1871）に召し上げられるまで、内藤家はこの屋敷を持ち続けた。

えどおかみやしきえず
江戸御上屋敷絵図 安永5年（1776）

「江戸大絵図」のような平面的な江戸図と違い、江戸上空から地面を見る形で江戸城とその周辺の様子を描く。内藤家の上屋敷は溜池を背に、江戸城外堀に沿う位置にあった。

おおえどちょうかんす
大江戸鳥瞰図 国盛画



主催 明治大学博物館
会場 明治大学博物館特別展示室

11/11 [月] - 12/14 [土]

東京都千代田区神田駿河台1-1 明治大学アカデミーコモン地階
HP <https://www.meiji.ac.jp/museum> 電話 03-3296-4448

写真：「山門豪傑双銃」一鷲斎国周画（部分）慶応元年・1865、
「女子埴輪頭部」伝茨城県出土 5世紀、「商品資料の整理風景（旧3号館カ）」1950年代

商品

考古

商品部門は2024年3月に常設展を刷新しました。2023年度の新収資料は、すでに常設展刷新に係わる新規展示品として公開されていることから、本展では「記録写真にある資料」という小テーマを掲げ、これまであまり公開する機会のなかった資料群を取り上げることにしました。

資料整理風景の写真（表紙）は、旧2号館の商品陳列館とは明らかに内装が異なり、1951年の資料室発足以降、1957年の陳列館開館までの間に使用された旧3号館の部屋の可能性があります。常設展にパネルを展示した旧2号館展示室の写真（1960年代）には地方物産以外の資料も多く見られます。学生服の人物に向かって左の後方にはまとまった数のガラス製品が見えます。その後に移転した小川町校舎（1966～1981年）の展示室は1980年前後の様子と考えられますが、写真もカラーが一般化する頃です。



1973年の商品陳列館再興時、伝統的工芸品を収集・展示する方針が採用されたが、その土台となったのが地方物産品のコレクションだった。観光が娯楽として定着する1960年代には、土産品として製造された置物の類も盛んに収集されていた。

琉球人形 沖縄県 1963年収集



1958～62年にかけてガラス製品が盛んに収集された。国産品・輸入品がそれぞれ収集されているが、1ドル=360円の固定相場の時代、輸入品は高額だった。当時、高級輸入雑貨が百貨店の花形商品であったことがわかる。

化粧瓶（化粧水入れ、パフ入れ、香水入れ）
チェコスロバキア 1962年収集



試験場から収集した陶器類は、何れも“水”に関わる品である。陶器は素地や釉薬の貫入に水が浸み耐水性に難があった。品質改良により今日では実用素材として充分な水準に達しているが、その試作途上のものであろう。

陶製花生 愛知県陶磁器試験場 1950年代前半



考古部門では化石人類レプリカおよび関連旧石器時代資料と東アジアの古代青銅器、日本の古墳時代における副葬品の充実を収集方針としています。昨年度は女子埴輪頭部（伝茨城県石岡市周辺）を購入しました。本例は主要な出土資料が国の重要文化財に指定されている茨城県行方市の三昧塚古墳（5世紀末）出土の人物埴輪と特徴がきわめて類似しています。同古墳は茨城県南部で人物埴輪が出現する最初期とされているため、本例も同地域の埴輪研究にとって貴重な資料となります。

今回は関連資料として茨城県を中心とした館蔵の埴輪資料を展示しました。埴輪は、一般によく知られている人物や馬だけでなく、家や道具類（武器・武具・傘など）、古墳を囲むように立て並べた筒状の円筒などさまざまな種類が作されました。古墳の上に長い年月に渡って並べられていたため、完全な形で出土することはほとんどありませんが、破片の状態であって多くの情報が得られます。通常は展示する機会が少ない破片資料ですが、埴輪の多彩さの一端を知っていただければ幸いです。



ランクの高い古墳ほど大型の円筒埴輪を並べる傾向があり、高さが77.4cmある本例は関東では屈指の大きさである。斜格子文の線刻をもつ円筒埴輪は珍しく、埼玉県域や霞ヶ浦の対岸地域とのつながりがうかがえる。

斜格子文の線刻がある円筒埴輪（茨城県玉里舟塚古墳、6世紀）



立体的なまぶた、頭部に回し掛けた革紐（頭絡）をつなぐ円形の部品（赤色で彩色？）、長方形の列点で鉢留を再現した口元の楕円形の馬具（鏡板）など、丁寧な造形である。諸特徴から茨城県出土資料の可能性が高い。

馬形埴輪頭部（出土地不明、6世紀）



頭部の髪から女子であることがわかる。首には首飾りの玉が残る。鼻を欠くが、眉・目・口の作風、化粧を表現した頬の赤彩、頭の大きさなど三昧塚古墳出土の女子埴輪（重要文化財）と類似点がきわめて多い。

女子埴輪頭部（伝茨城県石岡市周辺、5世紀）